

令和3年12月15日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文： ハンネス・マイヤーの建築思想と独ソ建築界（1926-1930年）

学位請求者： 文学研究科博士後期課程 岩澤 龍彦

審査委員

主査 文学部教授 伊藤 博明

副査 文学部教授 貫 成人

副査 文学部准教授 島津 京

岩澤龍彦氏の学位請求論文（課程博士）「ハンネス・マイヤーの建築思想と独ソ建築界（1926-1930年）」（以下、本論文）の内容は以下のとおりである。

本論文は、ドイツの建築家ハンネス・マイヤーが1926年から1930年まで活躍した、スイスとドイツ、およびソ連における建築活動と建築思想の全体的布置を考察するとともに、その中で特異な建築思想を唱え、実際に建築活動を行ったマイヤーの位置づけを試みたものである。

第1章「ドイツ建築におけるフォルマリズム」——ミース・ファン・デル・ローエのフォルマリズム批判を発端として、ドイツ建築における、テオ・ファン・ドゥースブルフ、ムテジウス、グロピウスのフォルマリズムが明らかにされる。ここでは、目的化した「形」、結果としての「形」が重視され、「芸術表出」や「芸術コンポジション」、また「様式」が主題化された。一方で、このような「形」を通じて「ドイツ文化」を対外的に示す政策がとられた。

第2章「ドイツ・スイス建築におけるリアリズム」——ミース・ファン・デル・ローエと雑誌『ABC』に拠る建築家によって、リアリズムは代表される。彼らは時代の要求から出発して、建築におけるプロセスとしての建設、材料生産の工業化に訴えることによって芸術と技術の二元論を廃棄しようとし、ここでは、技術、エンジニア、構造が支配的な規準となった。

初期マイヤーもまたリアリズムに属し、彼の論考「新しい世界」では、建設は技術的なプロセスであると定義された。しかし彼に特異な点は、「機能」についての独自の見解にあり、彼が「目的は機能である」と述べるときの「機能」とは建築プログラムを正常に作動させることであり、算術とダイアグラムが用いられた。この点でマイヤーは建築の「科学化」を試みていたと言える。

第3章「バウハウスにおけるフォルマリズム批判」——フォルマリズム批判は、マイヤーが校長を務めていた時代のバウハウスでもエルンスト・カライを中心に展開された。彼は、所与の現実的で、具体的な要求に裏づけされた「生の物質的組織化」としての建築を提示した。これは技術偏重のリアリズムへの反省と生活への回帰に裏づけられており、徹底した現実志向と、技術的事象にとどまらない建築像を示した点で、オルタナティブ・リアリズムと見なすことができる。

マイヤーもこれに連動して、自身の建築論を変化させ、「生」への志向を強めるとともに、さらには、建築物をとりまく環境的な諸条件の総体としての「地勢」が考慮に入れられた。このような建築思想が具体化されたのが連邦学校案であり、ここでは、組合的な集

団生活を涵養すべく、集団的な組織構造が直接的に反映され、また、ベルナウの森という「地勢」が勘案された。この点において、マイヤーはオルタナティブ・リアリズムに属していたと考えることができる。

第4章「ソ連におけるマイヤー受容」——しかし、マイヤーの示した（オルタナティブ・）リアリズムの建築、そして彼の政治的態度をめぐっては「ねじれ」ともいうべき現象が起きていた。連邦学校案は組織化を体現する構築であったがゆえに、容易にナチスの学校へ変容させることができた。一方、バウハウスの「政治化」についてマイヤーの真意の把握には困難な部分があるが、事実として、国連コンペ案と連邦学校案はソ連の人々によって、全面的にはではないにしても評価されていた。

第5章「ソ連建築界の構図」——ソ連におけるマイヤー受容において生じたこの「ねじれ」の原因は、独ソ建築界におけるフォルマリズム批判を中心に示された三項関係のズレに求めることができる。ソ連建築界においても、芸術と技術の二元論を抱えるアスノヴァのフォルマリズム、それを批判するオサのリアリズム、そのリアリズムを技術偏重として批判するヴォプラのオルタナティブ・リアリズムが存在していた。しかし、これら独ソの建築界における類似した三項関係も、科学化と芸術、とりわけ、イデオロギーの差異によって独ソにおいてはズレが生じている。

マイヤーは、ヴォプラとの関係をめぐって、その心理的な組織化を「芸術」と名付けて「芸術の契機」を取り戻し、「スターリン化」された言語を用いたイデオロギーに与することで、ソ連のオルタナティブ・リアリズムに接近できたかもしれない。しかし、1932年の方針転換がなされたソ連建築界においては別の原理が作用していたはずであり、この新しい構図を改めて示し、マイヤーのソ連での建築活動を相対化することが今後の課題である。

本論文における特徴的な点、および評価すべき点については、以下を挙げることができる。

第一には、本論文は、本文 319 ページ、図版資料・参考資料・参考文献を含めて 422 ページにわたる力作であるが、全体で 5 章からなる全体は明快に構成されており、その論述の進め方も円滑である点である。

第二には、ハンネス・マイヤーという、バウハウスの校長を務めながらも、これまで必ずしも正当に論じられてこなかった人物の建築思想に光を充て、彼の過ごしたスイス・ド

イツ・ソ連の建築界の複雑な布置を明らかにしながら、その中での彼の位置について究明した点である。

第三には、マイヤーに関連する先行研究文献を渉猟するのみならず、マイヤーの未邦訳のドイツ語およびロシア語による、多くの第一次史料を丹念に読み解きながら、説得的な議論を展開した点である。

第四には、1926-1930年の独ソ建築界についての緻密な歴史的考察を踏まえたうえで、ドイツにおけるフォルマリズム、リアリズム、(マイヤーを含む)オルタナティブ・リアリズムという三項関係を取りだし、さらに、ソ連の建築界においても類似した三項関係が存在することを指摘する、美学思想的な観点からのアプローチによる独創的な議論を提示した点である。

一方、審査員からは本論文について幾つかの疑問点や問題点が指摘された。

第一には、本論文が対象とした1926年から1930年までのスイス・ドイツ・ソ連の建築界の動向の背景を形成している、より広い政治的・経済的・思想的・文化的な状況の説明がなされておらず、歴史的な文脈における理解がやや困難であるという点である。

第二には、第1章において重要な議論を構成している、グロピウスの建築思想については、最近のグロピウスをめぐる研究動向を必ずしも反映しておらず、その意味において、正確なグロピウス理解としては問題があるという点である。

第三には、論文のタイトルが「ハルネス・マイヤーの建築思想と独ソ建築界（1926-1930年）」であるにもかかわらず、独ソ建築界についての記述が大きな割合を占め、ハルネス・マイヤーとの関連性が、とりわけソ連に関しては、史料的な制限があるとはいえ、主題的に論じられていないという点である。

第四には、本論文において、もっとも独創的な議論を提示している、フォルマリズム、リアリズム、オルタナティブ・リアリズムの三項関係について、その関係をスイス・ドイツとソ連において類似したものとする議論には説得力に欠ける部分があるという点である。

とはいえ、本論文は、上述したような評価すべき優れた点を有しており、今後の発展性も十分に期待できることから、学位請求論文（課程博士）として是認することが適当であり、岩澤龍彦氏に学位を付与することが妥当であると、審査委員全員の合意によって判断した。